

## 読みがたりむかし話資料にみるアスペクト形式の分布

酒井雅史

### 1. はじめに

標準日本語では、動作の進行を表す場合も結果を表す場合もともにシテイルが用いられる。一方、京阪神を除く西日本では進行を表す場合はシヨルを、結果を表す場合はシトルを用いるというように、進行と結果では異なる形式が用いられることが広く知られている（工藤編 2004, 工藤 2014 など）。

表1 アスペクト対立のタイプ

		アスペクト	
		進行	結果
標準日本語	テンス		
	非過去	シテイル	
	過去	シテイタ	
西日本 (京阪神除く)	テンス		
	非過去	シヨル	シトル
	過去	シヨッタ	シトッタ

また、日本語諸方言においては、存在動詞アルの補助動詞形のテアツタ系（シテアツタ）、存在動詞イルの補助動詞形であるテイル系（シテイル、シテル）、存在動詞オルの補助動詞形であるテオル系（シテオル、シトル、シチョル）に加え、V+オル系（シオル、シヨル）がある程度まとまって分布しているという地域差がある。

これまでの先行研究で指摘されてきたアスペクト形式に関する地域差は、聞き取り調査や研究者の内省による調査の結果をもとに明らかにされてきた。アスペクト研究の大きな成果である工藤氏の一連の研究をはじめ多くの先行研究において、テイル系とテオル系の東西差や、テオル系とV-オル系の進行相と結果相における対立およびその消失、エビデンシャリティー・ミラティブティイー・待遇性との関わりなど、様々なことが明らかにされている。

緻密な調査による詳細な記述が必要なことは疑問を挟む余地もないが、一方で、これまで指摘されてきたアスペクト形式の地域差は、談話における使用実態においてどのようになっているのかといった疑問が浮かぶ。また、対立の消失や待遇性との関わりなどは、記述による成果と談話における使用実態の双方を合わせて包括的に探る余地があるように思われる。そこで、本稿では、それらの疑問を探る第一歩として、談話資料の一種である昔話談話の資料として『読みがたりむかし話』（日本標準、以下『むかし話』資料）を用いて、アスペクト形式の分布をみたうえで、以下のことを述べる。

- (a) 『むかし話』資料に見られたアスペクト形式の全国分布は、これまでの聞き取

り調査・内省調査によって明らかにされてきた分布と一致する（4.1 節）。

- (b) 昔話談話の分析から、テイル系が主として用いられる地域でもテオルが、テオル系が主として用いられる地域でもテイル系がそれぞれ一定数用いられる（4.1 節）。
- (c) テオル系が主として用いられる地域では、テオル系と V-オル系の出現状況が一樣ではなく、テオル系と V-オル系の対立のあり方について談話資料から探ることができることが示唆される（4.2 節、4.3 節）。

以下、本稿で分析対象とする『むかし話』資料について 2 節で紹介したのち、3 節で分析方法を示し、4 節で調査結果についてみる。5 節はまとめである。

## 2. 『むかし話』資料について

本稿で分析に用いる『むかし話』資料は、1973～1978 年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として 2004～2006 年に刊行されたものである。『むかし話』資料は、各地に伝わる伝承や伝説を語ったものを再録した資料である。他の昔話を収めた資料と比べて、各府県内での地域的な偏りが出ないように万遍なく昔話が集められており、全国的な分布を対照するための談話資料として扱えるものである。また、編集の段階で地域の人をはじめ教育委員会等多くの人間が関わり、各地の方言らしさが損なわれないよう編集されている。以上の特徴を持つ『むかし話』資料は、各県およそ同じ分量の話が収められており（40～70 話；60,000～80,000 字程度）、地域特有の話とともに、都府県間で共通する話も収められている。

『むかし話』資料は、むかし話を語るという日常談話における使用実態の一部を反映した資料として位置づけられ、文末表現の定型性について全国的な分析を行っている日高（2013, 2018）のほか、大阪方言のノダ相当形式ネン・テンの成立を検討した野間（2014）、関西方言の素材待遇形式の分布について述べている酒井（2019）、存在動詞の分布を概観している酒井（2021）などがある。

本稿では、各地方言の実態を反映した談話の一つである『むかし話』資料を用いて、アスペクト形式の全国分布を示すことを目的とする。

## 3. 分析方法

### 3.1. 分析対象

『むかし話』資料のうち、42 都府県を対象に調査・分析を行った。北海道・広島県・山口県・徳島県・熊本県・沖縄県は、収録話の半数以上で共通語の特徴が多く表れているため今回の分析対象からは除いた。また、対象とした都府県の中でも話の中で一貫して丁寧語が用いられている、他の収録話と比較すると文法面・語彙面ともに共通語が用いられていることが明らかであるなど、方言の特徴が表れていないと判断した秋田県（8 話・370 文）・栃木県（2 話・64 文）・新潟県（1 話・24 文）・福井県（1 話・52 文）・岐阜県（4 話・174 文）・三重県（10 話・324 文）・鳥取県（1 話・18 文）・福岡県（21 話・1318 文）・佐賀県（3 話・103

文)・宮崎県(11話・772文)・鹿児島県(1話・71文)の一部の話も対象とはしていない。ただし、埼玉県・東京都・神奈川県・静岡県はいずれも共通語的な特徴が色濃く表れているが、首都圏およびその影響を受けている周辺の地域における共通語の様子を見るため対象に含めた。『むかし話』資料の中から以上の選定を行ったうえで、今回の分析対象としたデータ分量は、表2のとおりである。

表2 分析対象とした分量

都道府県	話数	文数	都道府県	話数	文数
青森	46	2043	滋賀	65	1958
岩手	45	2301	京都	44	1977
宮城	58	2404	大阪	59	2389
秋田	35	2003	奈良	60	2166
山形	48	2480	兵庫	54	2357
福島	57	2560	和歌山	65	2154
茨城	37	2104	鳥取	61	1823
栃木	62	2038	島根	49	1926
群馬	56	2007	岡山	37	1895
埼玉	37	2071	香川	62	1909
千葉	55	2172	愛媛	58	2013
東京	47	2115	高知	41	2366
神奈川	73	2059	福岡	22	1265
新潟	41	2207	佐賀	44	2303
富山	67	2094	長崎	50	2494
石川	42	2641	大分	52	2001
福井	73	1951	宮崎	29	1691
山梨	49	1715	鹿児島	43	2500
長野	46	2227			
岐阜	58	2104			
静岡	57	2276			
愛知	51	2341			
三重	53	1515			

### 3.2. 『むかし話』資料にみられたアスペクト形式

『むかし話』資料に現れた用例は、テアル系(テアル(1)・チャル(2))、テイル系(テイル(3)・テル(4)・テイテアッタ(5)テラ(6))、テオル系(テオル(7)・トル(8)・チヨル(9))、V+オル系(V-オル(10)・V-ヨル(11)(12))に分けて収集した<sup>1)</sup>。これらのうちV-ヨルについては、アスペクトとしてではなく待遇表現としても用いられる方言がある。近畿方言の用例を収集する際には、待遇性をともなわずアスペクトを表していると考え

1) 以下、引用する例文の出典を【都府県：話の題】の形で用例の末尾に示す。また、分析対象の形式をゴシック体のカタカナで示す。

られるもののみを収集の対象とした<sup>2)</sup>。

- (1) むげに來たわがぜどさ、むすこも、まじテアツと。  
【青森：だまくらかさされた狐】
- (2) 「あの紀州の大工にけずらした板、どころにおいチャルかいな。」  
【和歌山：寺大工勘平】
- (3) むかし、どひんというて、土の茶びんで湯をわかしテイタがなあ。  
【奈良：あとへ残るは金のつる】
- (4) 「私で役に立つなら協力しまっせ。ちょうど、すもうのけいこの相手を探しテ  
タとこや。」  
【大阪：すもうとり「三草山」】
- (5) 鼻の先が見えるようになったら、鼻の先に屋根屋の一人が、しがみついテイテ  
アツとど。  
【秋田：ふしぎなおうぎ】
- (6) じいさまは、山さたきぎ取りに、ばあさまは、川させんたくに行っテラツとど。  
【岩手：瓜子姫っこ】
- (7) そんなでも、おとつつあは、たかのすすぼこりをすいこんで、くしゃみの出たい  
のをば、がまんして、どうなることかとのぞいテオツとっちゃん。  
【新潟：くわずよめさ】
- (8) 「日本一。桃太郎。」と、大きよい文字で書いトルあさひのぼりの旗をたかだか  
とあげたんじゃ。  
【香川：桃太郎としかえしおに】
- (9) 「あの大蛇は酒が好きでう、大酒を飲んジョルとき、退治すりゃあええのに  
のう。」  
【山口：大蛇が池】
- (10) 本間さま〔筆者注：医者〕は、山寺のどえらく大きな木のかげに身をちぢめて、  
そうとつ、本堂のあたりをながめオツとど。 【静岡：キツネの医者さま通い】
- (11) 「この先いきヨツたら、牛追いどんがおるで、それへ開け。」  
【兵庫：舌切りスズメ】
- (12) ある日んこと、おとつつあんがぞうりばつくりオツテ、ワラが三本あまつたつ  
ち。  
【長崎：ワラ三本が千三百円に】

#### 4. アスペクト形式の分布

本節では『むかし話』資料にみられたアスペクト形式のうち、4.1節で分析結果の概観を行う。続く4.2節でテオル系の詳細について、4.3節でV-オル系の分析結果についてみる。

---

2) すなわち、近畿方言の用例収集にあたっては、待遇対象が動物など下位者に位置づけられる用例を除外した。一方、V+オル系の用例は近畿方言に限らず待遇性を有していると考えられるものがみられたが、近畿方言以外では先行研究による指摘がなく、アスペクト的意味としても取れることから収集の対象とした。

#### 4.1. アスペクト形式の分布概観

『むかし話』資料に現れたアスペクト形式に関する分析の結果は、表3および図1の通りである。一部都府県下での地域差が認められるものも一部あったが、おおむね都府県内での地域差はみられず、煩雑になるのを避けるため、結果は都府県単位で示している。

表3 『むかし話』資料に現れたテアル系・テイル系・テオル系

都府県	アスペクト形式			計	都府県	アスペクト形式			計
	テアル系	テイル系	テオル系			テアル系	テイル系	テオル系	
青森	7 3.0	230 97.0		237	滋賀		174 74.4	60 25.6	234
岩手		247 100		247	京都		94 29.8	221 70.2	315
宮城		186 98.9	2 1.1	188	大阪		261 73.7	93 26.3	354
秋田	5 2.5	199 95.7	4 1.9	208	奈良		114 32.4	238 67.6	352
山形	1 0.4	252 95.5	11 4.2	264	兵庫		71 20.3	278 79.7	349
福島		268 98.2	5 1.8	273	和歌山	3 1.0	303 89.1	34 10.0	340
茨城		342 98.8	4 1.2	346	鳥取		36 12.2	259 87.8	295
栃木		225 99.6	1 0.4	226	島根		79 29.3	191 70.7	270
群馬		331 98.5	5 1.5	336	岡山		40 16.6	201 83.4	241
埼玉		319 90.1	35 9.9	354	香川		41 14.9	234 85.1	275
千葉		173 59.9	116 40.1	289	愛媛		71 25.6	206 74.4	277
東京		276 81.9	61 18.1	337	高知		35 15.6	190 84.4	225
神奈川		411 95.1	21 4.9	432	福岡		74 30.5	169 69.5	243
新潟		309 84.9	55 15.1	364	佐賀		158 49.7	160 50.3	318
富山		80 21.8	287 78.2	367	長崎		76 16.5	386 83.5	462
石川		88 21.9	314 78.1	402	大分		54 18.3	241 81.7	295
福井		209 91.3	20 8.7	229	宮崎		164 72.2	63 27.8	227
山梨		324 99.1	3 0.9	327	鹿児島		141 37.6	234 62.4	375
長野		217 75.9	69 24.1	286					
岐阜		65 18.1	294 81.9	359					
静岡		402 95.9	17 4.1	419					
愛知		12 2.8	411 97.2	423					
三重		115 37.6	191 62.4	306					

表中の各セル上段は用例の実数を、下段は使用率(%)をそれぞれ示している。

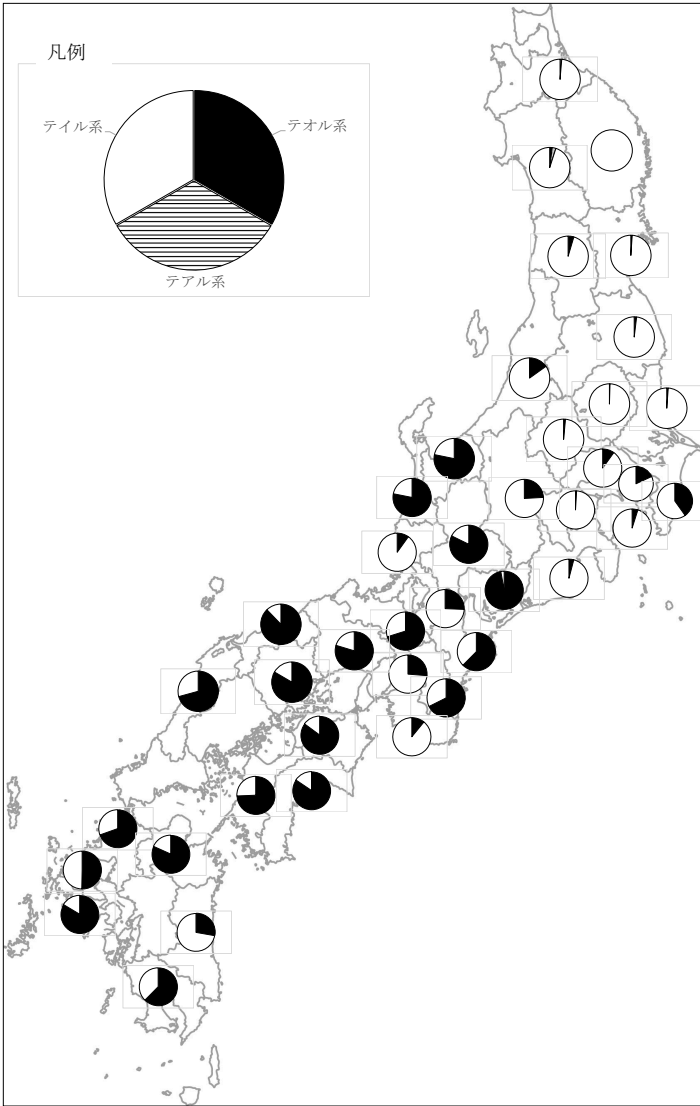


図1 『むかし話』資料に現れたアスペクト形式の分布

存在動詞を分析した酒井（2021）の結果と比べると、存在動詞のアル・イル・オルのいずれを用いるかとアスペクト形式のテイル系・テオル系のいずれを用いるかはおおむね一致する。すなわち、存在動詞オルを用いる富山・岐阜・愛知以西の西日本ではテオル系が優勢であり、存在動詞イルを用いる東日本ではテイルが多く用いられる。これらの分布状況は工藤編（2004）や工藤（2014）などで示されている分布と一致する。ただし、先行研究と異なる傾向として（13）a・bの点が指摘できる。

- (13) a. テオル系が優勢な西日本の中にあつて、福井（90.1%）・滋賀（74.4%）・大阪（73.7%）・和歌山（89.1%）・佐賀（49.7%）<sup>3)</sup>・宮崎（72.2%）では半数以上テイル系が用いられる。
- b. テイル系が優勢な東日本の中にあつて、山形（4.2%）・埼玉（9.9%）・東京（18.1%）・千葉（40.1%）・神奈川（4.9%）・新潟（15.1%）・長野（24.1%）・静岡（4.1%）において、テオル系の使用がみられる。

アスペクト形式としてテルが使用される京阪神のうち、大阪はこれまでの先行研究と一致する結果と言える。表3および図1では都府県ごとに結果を示しているが、京都府下では、京・山城地域ではテイル系が65%以上であるのに対して、丹波地域では24%、丹後地域では12%と優勢な形式には地域差があった。この点を踏まえると大阪・京都を中心とした滋賀県・福井県・和歌山県への地理的なまとまりが認められる<sup>4)</sup>。

一方、佐賀県・宮崎県・鹿児島県は種々先行研究においてはテオル系が使用される方言とされる。『むかし話』資料全体で方言の特徴がみられないということはなく、今回の結果は、昔話談話という談話資料においてアスペクト形式に共通語化の兆候がみられたのだと考えられる。

また、先行研究における成果と一致しない点として、(13) b が指摘できる。すなわち、テイル系が優勢な東日本方言の中でも、山形・埼玉・東京・千葉・神奈川・新潟・長野・静岡ではオル系の使用が一定数みられる。とくに、千葉・長野・東京・新潟ではそれぞれ40.1%・24.1%・18.1%・15.1%と高い割合で使用され、偶発的な使用ではないことがうかがえる。

さらに、テオル系の使用に関する特徴としては、テオル系が優勢な方言では、テオルから変化したトル・ Chol が多く用いられる傾向にある。次節でこの点を詳しくみる。

#### 4.2. テオル系の詳細

テオル系の詳細な出現形式は表4のようであった。表4では4.1節でみた全体の結果においてテオル系が優勢（半数以上）であった都府県を黒地白抜きで示している。

3) 佐賀県のテオル系の使用は半数以上ではないが、テイル系とテオル系がほぼ同程度用いられ、他のテオル系が優勢な西日本方言とは異なる傾向であるためここに含めた。

4) 京都・大阪を中心とした周囲分布にはなっておらず、西日本の中でテオル系が優勢な方言に挟まれる形でこのような結果が得られたのは、各方言における共通語化のあり方や、敬語接辞・否定接辞などとの共起といった形態統語的環境の異なりなど、いくつかの要因が考えられる。詳細な分析は今後の課題としたい。

表4 テオル系の出現形式

都府県	テオル系			計	都府県	テオル系			計
	テオル	トル	テョル			テオル	トル	テョル	
青森				0	滋賀	5	55		60
岩手				0	京都	29	192		221
宮城		1		2	大阪	25	68		93
秋田	4			4	奈良	21	217		238
山形	11			11	兵庫	27	247	4	278
福島	5			5	和歌山	9	25		34
茨城	4			4	鳥取	33	217	9	259
栃木	1			1	島根	55	17	119	191
群馬	5			5	岡山	29	170	2	201
埼玉	35			35	香川	15	215	4	234
東京	116			116	愛媛	26	145	35	206
神奈川	39	16		61	高知	10	21	159	190
新潟	12	9	6	21	福岡	81	80	8	169
富山	32	23		55	佐賀	36	123	1	160
石川	71	216		287	長崎	231	33	122	386
福井	54	260		314	大分	11	11	219	241
山梨	9	11		20	宮崎	6		57	63
長野	3			3	鹿児島	121	24	89	234
岐阜	22	47		69					
静岡	128	144	22	294					
愛知	16	1		17					
三重	14	397		411					
	82	109		191					

テオル系が優勢な西日本と比べると、テイル系が優勢な東日本では、変化形のトル・テョルの使用はほとんどみられず、テオルが使用されている。これらテイル系が優勢な方言にみられるテオルの使用は、昔話談話の特徴が現れたものと考えられる。すなわち、談話展開の点からどのような位置でテオル系が使用されているかをみると、そのほとんどが、(14)～(18)に示したような話の開始部冒頭部分や、語りの終わりである終結部(19)、会話文(20)(21)で使用されていた。

- (14) 長者さまは、めんごくてめんごくて、おひなさまみてえに育て**テオッタ**けど。  
【山形：わらしことネムの花】
- (15) むかし、秩父の三峯山のふもとに鬚僧大師というぼうさんが住ん**デオッタ**。  
【埼玉：鬚僧大師と大蛇】
- (16) むかし、あるところにえだぶりのいい松が生えている川がありました。その近くに彦六という若者が住ん**デオリ**ました。  
【神奈川：黄金のおの】
- (17) むかしなあ、永明寺山のふもとにおかしなこぞうがおつたと。ねんがらねんじゅう、まっぱだかで、ふんどしいっちょうだけ。仕事はちっともせずにごらぶらし**テオッタ**と。  
【長野：あんころもちこぞう】
- (18) むかし、都田川には、カッパがたくさん住ん**デオッタ**と。  
【静岡：カッパをだました男】
- (19) 大尽どんの家のなくなったお金は、だんなが神だなのおくにしまいわすれ**テオ**



ツタのが、あとでわかったが、お春の命は、もうとまったままだった。

【千葉：川辺のお春】

(20) 「いんや、殿は、すでに橋の中ほどに、さしかかっテオルで、なんとかならんか。」

【東京：鬼の金六】

(21) 「ばんねになったら、いろりにでつかい火をたいておるテオルまいか。クボに  
けテオルうちにさらがい落としてやき殺しやいいぞ。」【新潟：くわすよめさ】

一つの話を通して上述の箇所以外ではテイル系が用いられており、これらの地域におけるテオル系は、昔話を語る上でのそれらしさを演出する効果をもって使用されているものと考えられる。日常談話における昔話談話の特徴が現れているといえよう。むかし話の表現形式について分析している日高(2018)では「関東から近畿にかけての都市部とその近隣地域では、そもそも典型的なむかし話の採取量が少なく、(中略)むかし話固有の「語りの型」というものが、地域内で共有されていないということの意味するだろう」(日高 2018:229)と述べられている。このことを踏まえると、共通語圏の中でも東京都・千葉県でテオル系の使用が多くみられたのは、昔話の語りの型というものがいない地域において昔話らしさを表現するためにテオル系が使用されているのだと理解される。

一方、テオル系が優勢な西日本方言をみみると、先述の通りテオルよりもその変化形のトル・ Cholが多用されていることが分かる。ただし、岐阜県ではテオルとトルが、長崎県・鹿児島県ではテオルと変化形のトル・ Cholがそれぞれ同程度用いられ、愛知県ではほとんどがトルに偏るといったようにその様相は一様ではない。また、これらテオル系の変化形が用いられる地域では、「第一中止形(連用形)+オル」と「第二中止形(テ形)+オル」の文法化したシオル系の形式とシトル系の形式がそれぞれ進行相と結果相で使い分けられるという対立がみられる方言と、その対立を失いつつある方言とがあることが知られている。次節ではV-オル系の結果を示し、昔話談話に観察されるこの違いをみる。

#### 4.3. V-オル系の使用について

V-オル系の出現状況は表5の通りであった。なお、高知ではシユウの用例が47例みられたが(22)、見出しとしては示さずにV-ヨルの中に含めている。

(22) そいて、ようよう歩きユウ馬にのったもんよ。

【高知：万六ばなし】

表4の結果とあわせて表5をみると、テオル系が優勢な方言では変化形のトルおよび CholとV-ヨルがそれぞれ用いられていることが分かる。

表5 V-オル系の出現形式

都府県	V-オル系			都府県	V-オル系		
	V-オル	V-ヨル	計		V-オル	V-ヨル	計
青森			0	滋賀	4		4
岩手			0	京都		2	2
宮城			0	大阪		1	1
秋田			0	奈良	2	18	20
山形			0	兵庫	1	69	70
福島			0	和歌山		11	11
茨城	2		2	鳥取		77	77
栃木	1		1	島根		16	16
群馬	1		1	岡山		82	82
埼玉	1		1	香川		194	194
千葉			0	愛媛		139	139
東京	2		2	高知		279	279
神奈川			0	福岡		32	32
新潟			0	佐賀	5	76	81
富山			0	長崎	21	22	43
石川			0	大分	13	103	116
福井	3	2	5	宮崎		21	21
山梨			0	鹿児島	12		12
長野	1		1				
岐阜	7	33	40				
静岡	7	1	8				
愛知	3	1	4				
三重		10	10				

一方、4.2節で述べた、岐阜県・長崎県・鹿児島県は他の方言に比べてV-オル系の使用が少ないことが分かる。特に愛知県ではV-ヨルが1例しかみられない。日高(2002)では『方言文法全国地図第4集』(以下、GAJ)198図・199図「散っている」のデータを用いてアスペクト対立の全国分布を示している(図2)。日高(2002)による分布図では、愛知県・鹿児島県は進行相と結果相ともにテオル系が用いられる方言と言える、昔話談話における使用実態からもV-ヨルとシトル系の対立がない方言であることがうかがえる<sup>5)</sup>。しかし、図2の分布では岐阜県・長崎県はシヨル系とシトル系の対立がある地点がみられるが、今回の結果における単純な用例数の割合からはその傾向がみられない。

5) 本稿では進行相/結果相ごとの出現状況や、動詞分類による用例の分析といった詳細な分析までは及んでいないため、このことは断言できないかもしれない。詳細な分析は、この点は今後の課題としたい。

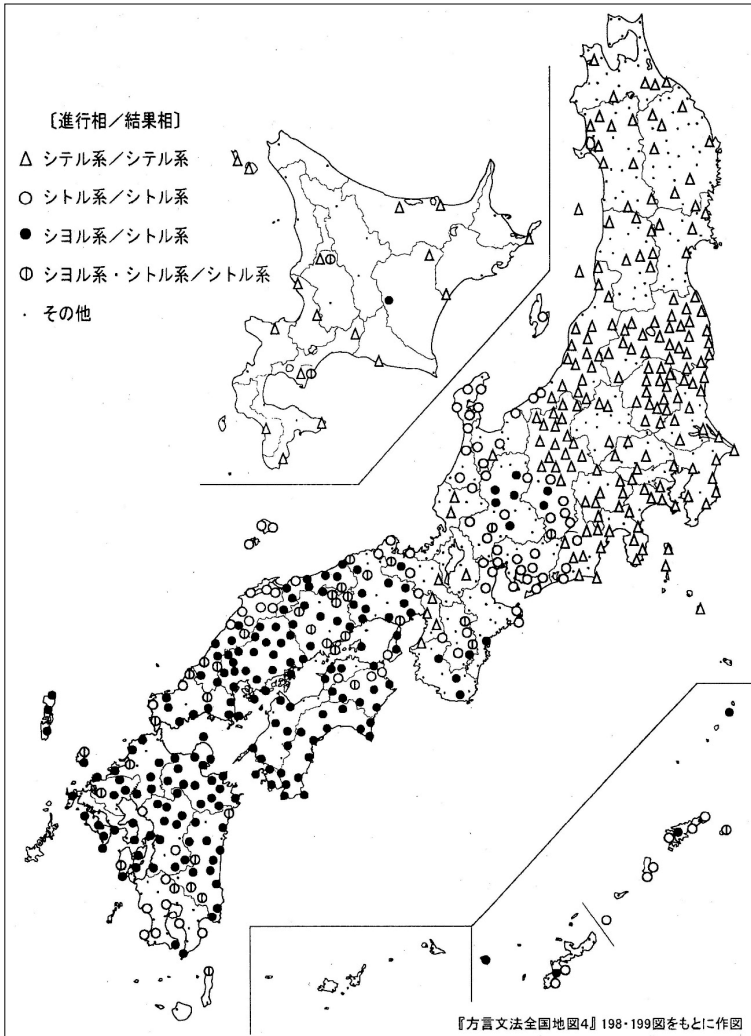


図2 進行相／結果相のAspect対立の全国分布 (日高 2002 : 70)

なお、V-オルは、用例数は少ないものの全国に散見される。これらのV-オルは、テイル系

の優勢な方言における昔話らしさを出すためのテオルの使用と同様と考えられる (23) (24) のような例のほか、特に会話文の用例において (25) (26) のような驚きを表していると思われる例が地域に限らずみられた。

- (23) そこで、カニどんはしぶしぶなたを持って、また、細い道を歩いていき**オッタ**ラ、こんどは、まっすぐな道ばっかいであった。

【鹿児島：サルどんとカニどんの餅合戦】

- (24) 女の人はの、はずかしそうにもじもじしながら、着物のすそをめくっての、雪のようにまっ白な、すんなりとした足を出し**オッタ**わけさ。

【静岡：キツネの医者さま通い】

- (25) 「ほう、なんとりっぱになり**オッタ**なあ。えらいもんじゃ、もっと大きいなれるか。」

【滋賀：だまされたタヌキ】

- (26) 「すっかり待たせ**オツテ**、はようチクの木とやらを出してみよ。」

【茨城：額田のタツサイ】

また、これらの例のほか感情性待遇（西尾 2015）と考えられる例も V-オルの用例にはみられた。

- (27) 山ん神さんのいいつけも聞かじ、[鬼が：筆者注] 神様にかくれて、こっそい里に下ってきてにゃあ、悪かことばっかいし**オッタ**げな……。

【長崎：泣く浜】

テオル系が優勢な方言の中でも滋賀県・奈良県・兵庫県を除く近畿方言以西～福岡県では V-オルの使用がみられない。これらの方言では、V-ヨルが (28) (29) (30) のように進行を表している用例とともに、(31) (32) のように驚きも表していると思われる用例が散見された。

- (28) 「ははあん、これが、タヌキのよめ入りか、おもっしょいぞ。」思うて見**ヨル**と行列は、どんどん、峠をこえておりて行きだした。

【香川：タヌキのよめ入り】

- (29) 若者は、おばあさんが、おだんごをくうたらいかんが、どうするじゃろやと思つて、じいっと見**ヨッタ**んじゃそうな。

【愛媛：どんだばらのタヌキ】

- (30) 野らの仕事がない日にゃ、人んくの、荷はこびのだちんをして、働き**ヨッタ**そうな。

【高知：キツネのだちん】

- (31) 大きな馬の足が、あつという間に、おつとうとおつかあをふんづけてしまい**ヨッタ**。

【岐阜：雨にカエルがなくわけは】

- (32) いかにも魚がほしそうに、鼻をびくびくさせ、舌なめずりをし**ヨン**じゃ。

【香川：オオカミの恩がえし】

これら V-オル系にみられる感情性待遇と考えられる例は、日常談話の中でも昔話談話を通してこそ観察されるものと言えよう。なお、井上 (1998) では、関西中央部における存在

動詞のオル、アスペクト形式のトル、V-オルの卑語化のメカニズムについて、「オル・～トルの卑語化の前提として、イル・～テルが併存形として存在していたと考えられ」（井上1998:166）、V-オルの卑語化にはシオル系とシトル系のアスペクト対立の消失が要因として考えられることが述べられている。本稿でみた形式の分布状況から、『むかし話』資料のさらなる分析を行うことでこの点を談話資料から探ることができる可能性が示唆されたと考える。

## 5. まとめ

本稿では、談話資料の一種である昔話談話の資料として『むかし話』資料を用い、そこに現れたアスペクト形式の分布に関する分析から次のことを述べた。

- (a) 『むかし話』資料に見られたアスペクト形式の全国分布は、これまでの聞き取り調査・内省調査によって明らかにされてきた分布と一致する（4.1節）。
- (b) 昔話談話の分析から、テイル系が主として用いられる地域でもテオルが、テオル系が主として用いられる地域でもテイル系がそれぞれ一定数用いられる（4.1節）。
- (c) テオル系が主として用いられる地域では、テオル系とV-オル系の出現状況が一樣ではなく、テオル系とV-オル系の対立のあり方について談話資料から探ることができることが示唆される（4.2節、4.3節）。

【付記】本稿は、JSPS 科研費 26244024 および 20K13047 の成果の一部である。

## 参考文献

- 井上文字（1998）『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』秋山書店。
- 工藤真由美編（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』ひつじ書房。
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房。
- 酒井雅史（2019）「関西方言における素材待遇形式の分布—読みがたり昔ばなし資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』31, pp.1-15, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- （2021）「読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布」『甲南国文』68, pp.47-61, 甲南女子大学日本語日本文学科。
- 野間純平（2014）「近畿方言におけるネン・テンの成立—昔話資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』26, pp.51-69, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。

- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動—対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮—』くろしお出版.
- 日高水穂 (2002) 「方言の文法」北原保雄監修・江端義夫編『朝倉日本語講座 10 方言』, pp.68-87, 朝倉書店.
- (2013) 「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書 —言語地図と方言談話資料—』pp.13-32, 国立国語研究所.
- (2018) 「昔話の談話構造と表現形式にみる地域性」『國學院雑誌』119-11, pp.217-230, 國學院大學文学部資料室.

(文学部 講師)